

名作歌舞伎全集

第五卷

奧州安達原 伊賀越道中双六
本朝廿四孝 繪本太功記
近江源氏先陣館

名作歌謡傳全集 五

鎌倉三代記

附

妹背山婦女庭訓
競伊勢物語

東京創元社

昭和四十五年十月二十六日 発行

名作歌舞伎全集

第5巻 丸本時代物集四

監修者

利倉幸一
河竹登志夫
郡司正勝
山本二郎
戸板康二

発行所

株式
会社

東京創元新社

代表者

秋山孝男

(16) 東京都新宿区新小川町一十六

電話(〇三)二六八八二三一
振替東京一五六五

印刷・株式会社金羊社
製本・株式会社鈴木製本所
用紙・株式会社富士川洋紙店
写真版・(株)興陽社、(株)万英社

万一、落丁乱丁がありましたらお取替えいたします。

目次 (名作歌舞伎全集第五卷 丸本時代物集四)

奥州安達原 (袖萩祭文) (装置図 八木恵一) 三

本朝廿四孝 (廿四孝) (装置図 高根宏浩) 三

近江源氏先陣館 (盛綱陣屋) (装置図 八木恵一) 七

鎌倉三代記 (三代記) (装置図 八木恵一) 二五

妹背山婦女庭訓 (妹背山) (装置図 萩原勝美) 一五

競伊勢物語 (伊勢物語) (装置図 釘町久磨次) 三三

伊賀越道中双六 (伊賀越) (装置図 釘町久磨次) 三七

絵本太功記 (太功記) (装置図 八木恵一) 三二

解 説

戸板康二

校訂について

郡司正勝

山本二郎

写真と資料提供―演劇博物館、演劇出版社、大谷図書館

梅村豊

奥^{おう}

州^{しゅう}

安^あ

達^{だち}

原^{がはら}

(袖萩祭文)
そではぎさいもん



解説

奥州安達原

戸板康二

オウシュウアダチガハラ。宝暦十二年九月十日初日の大坂竹本座初演の浄瑠璃。作者は近松半二のほか、竹田和泉、北窓後一、竹本三郎兵衛等の名が列ねてある。前九年合戦後、安倍貞任・宗任兄弟が再挙を計ろうとする筋で、場面が奥州なので、安達原の鬼女の伝説を、四段目にもちこみ、善知鳥安方の伝説を、二段目にとり入れている。

以前はまれに四段目も出たが、今は三段目の切、環宮明御殿の場俗称「安達三」だけが残り、それも「たださえ曇る雪空に」の、袖萩の出から演じるのが普通である。

本文、大序、まず鎌倉御所に勅使が下り、八幡太郎義家は鶴に金の札をつけて放してやる。次が吉田社頭で、何者が環の宮を誘拐する。生駒之助が九条の遊女恋絹と戯れる。切の義家の館に恋絹が廓からぬけ出して来たところ

に、悪人の維時があらわれ、義家と義家の舅（妻敷妙の父）の直方の罪を糺弾、義家の妹八重幡が恋絹の身の代金を払って、かわりに生駒之助をゆずれという場面がある。流人の大赦で奥州に帰る桂中納言は義家に十握の宝剣、環の宮の行方を問う。恋絹が安倍貞任の妹と知った義家は生駒之助と二人を落してやり、手柄を立てるように、それとなく教える。

二段目は奥州外ヶ浜で善知鳥文治安方の女房お谷を海人の長太がくどいて、長太自身の女房に追われるおかしみがある。ならず者の南兵衛が文治に貸した金の催促をしたあと、渚にいる鶴の金札を怪しい男がとって逃げてゆく。次が文治の内で、やがて鶴を殺して金札をとったのは、主筋安倍貞任の子清童を預かっている文治が薬代を作るためだとわかる。南兵衛が無体にもお谷を抵当につれてゆこうとすると、文治が金札を渡す。自分の罪を訴人させようとして文治がお谷を代官所にやったあと、南兵衛は安倍宗任という実名を打ち明けて物語をする。捕手が来て文治は縄にかかるが、それを見た清童は悶死、宗任が金札を見せて自分が犯人といい、切腹しかけた文治を制止して、ひかれてゆく。じつは宗任は、わざと罪人になって都に上り、義家と対決するつもりなのである。

このあとが三段目の口の朱雀堤で、八重幡姫が恋絹と会

い、非人小屋の杯を借りる。そこに居合わせた直方は小屋にいる乞食が姉娘の袖萩と知っておどろく。直方が去ったあと、袖萩は今のが父と知って、あとを追う。

次が環の宮明き御殿で、義太夫では俗にこの三段目の切を「袖萩祭文の段」という。しかし原作はその前に「敷妙使者の段」「矢の根の段」があつて、長い場面である。

この御殿の留守を守っている像仗^{けんじょう}直方と妻の涙夕^{なみよ}が姉娘の身の上を歎いている所に、妹娘の敷妙が義家の使者として来る。直方は敵味方になつても妻は去らぬという義家の心を察して感じ入るが、やがて義家が来て、続いて桂中納言が来る。引かれて来た宗任は、中納言に梅の花を見せられ、矢の根で肩口を裂き、白旗に歌を書く。この問答のくだりは兄弟の關係を隠した、作者のトリックである。

おもしろい場面だが、ここが普通出ないのは、最近、袖萩と貞任の二役を替わる場合が多くなつたからで、つまり貞任から袖萩になり、又貞任に替わる煩^{わづら}を避けるためだろ

う。もっともこの二役を替わるのは、三代目歌六から吉右衛門への伝統が残ったからにちがいない。別に、六代目友右衛門や十二代目仁左衛門も、この二役を演じている。(もちろん、替わらない人もいる)

袖萩の祭文の所は、雪の中に盲目の非人の母親が娘をつ

れて親の家の門の前まで来ながら、戸をへだてられてはいれずにいるというだけで、哀れをそそる。その陰惨さをわずかに音楽で救つているともいえる。吉右衛門は、袖萩がいわゆる「加役^{かやく}」(柄にない役)だったが、祭文では美声をきかせた。

この芝居では、「この垣ひと重がくろがねの」という詞章が有名だが、袖萩としては、祭文よりもむしろ、のちの「見れど盲の垣のぞき」のクドキが見せ場なのだ。ここで「身は濡鷲の芦垣や」で、お君と二人で上下に(いろいろなやり方がある)きまるあたりが、眼目といえよう。

像仗^{ざうじょう}の切腹のあと、奥から出た公卿姿の貞任が花道へ行くと、義家の呼びとめになる。「何やつ^{なんやつ}の仕わざなるや」のセリフで、前半を荒々しく、後半を公卿風のやさしい方に、分けていうのが型であるが、花道七三で、貞任が足をふみ出すのに合せて遠寄せを打ち込むあたりに、歌舞伎独特の面白さがある。

義家は典型的な御大将の役柄である。義家の「見参せん」で二人の仕丁が貞任にかかると、押えられたまま階段下手で、うしろ向きになり、顔のつくりを貞任らしく直すのが役者の仕勝手になつてゐる。

「貞任無念の牙を嚙み」で杵をぬぎ、「あら無念」で前向きになり仕丁を返し、袍の上をぬぎ白りんずの着附を見

せ、冠をはね、冠下の毛を前に乱すのが手順で「太刀に手を掛け」で、太刀を抜き、（この刀を抜く手つきを、吉右衛門は「菅原」伝授場門外の源蔵で、襲用していた）下手へ流して上を見上げた斜の見得をするあたり、吉右衛門の貞任はさすがに鮮かであった。

お君がすがりつくので貞任が泣く所、「恩愛の涙はらはら」のあたりも、刀を背中にまわし、頬を交る交るわが子に当てるといった情味ゆたかなやり方がある。

宗任は、前がびろうどのどてらだったのに対し、二度目の花道の出は、萌黄地に金縫いの四天、黒の素網、黒丸ぐけ、背に鬱金の仁王だすきという、打って変わった荒事風の扮装である。宗任の「勝負々々」で、貞任が二重に上るくんだり、吉右衛門のやり方は六方の型だった。

白旗をとってセリフのあと涙夕に渡し、次に赤旗をもつて、「奥州に押し立て押し立て」の大見得がある。旗をつかった見得として、代表的なものである。ここでお君が冠をもって近寄るので、袍を着、沓を穿き、その冠を手にする。ここでお君が裾を引き戻すのが、吉右衛門系の型である。

再会を約して義家と安倍兄弟が別れる幕切れは中央に貞任、平舞台下手の宗任が元禄見得、二重上手で義家がお君を囲う形である。

余事ながら、活歴的演出に凝っていた時代の九代目団十郎は、袖萩をつとめる時に、朱雀堤から来たというので足駄を穿いて出て、物笑いになったという話がある。この種の古典劇に、合理主義は無縁というものである。

四段目は、環の宮の行方をたずねてみちのくまで薬売りになって下る生駒之助と恋絹の「道行千里の岩戸帯」（恋絹はすでに懐胎している）のあと、白川の関に来た二人は、役人を巧みにだまして通る。切は安達ヶ原の一つ家である。安倍兄弟の母岩手御前が軍用金を作るために、旅人を殺し、死骸を床に隠している。環の宮もじつはこの家にいるのである。前場の二人がたどりつき、恋絹が陣痛を起し、薬を買いに老女と生駒之助が出て行ったあと、骸骨を見てふるえ上る恋絹の前に、老女があらわれ、腹の子をよこせといって殺す。生駒之助が帰って仰天していると、戸がいて、環の宮と、正装した老女があらわれ、名を名のり、宮の止声病（発音不能）を直す薬として赤子の血がほしさに殺した恋絹が娘だったと告白する。やがて匣の内侍が姿を見せ、谷に隠してあった十握の剣を発見、若宮はじつは義家の一子八若、自分は女装していた新羅三郎義光と名のる。（止声病も計略であった）鎌倉権五郎景政が八若を抱いてあらわれたのを見ると、老女はくやしがつて自害する。次の谷底で、山のかげから貞任があらわれ、母の死を

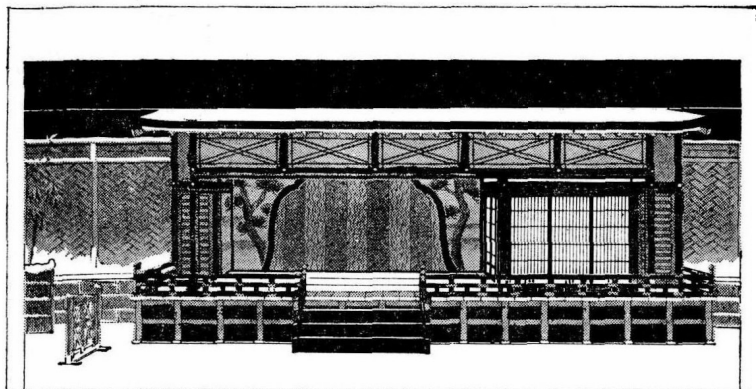
悼み、剣を義光に渡して、恭順を示す。

五段目は小松が柵で、義家と貞任が再会、貞任は切腹して宗任の身柄をたのむ。悪人はことごとく亡ぼされるという大団円である。

四段目は近年、かたばみ座が上演したことがある。かたばみ座はまた、三段目を前のほうから上演していた。

かたばみ座上演の袖萩（坂東鶴蔵）





環の宮明御殿の場

環の宮明御殿の場

役名 桂中納言教氏、実ハ安倍貞任。外ケ浜南兵衛、実ハ安倍宗任。八幡太郎義家。平像仗直方。仕丁、四人。軍卒、六人。貞任妻、袖萩。像仗妻、浜夕。義家室、敷妙。局、初霜。袖萩娘、お君。腰元、四人。

本舞台四間通し高足の屋体、襷欄間、黒塗りの高欄附、同登り高欄附、向う見附金張りの襖、真中に瓦燈口、錦の緞張を掛け、上手一間屋体、四間通しの欄間、翠簾をおろしある事。上手屋体の前に垣を結つたる青竹の植込み、下手柴垣、いつもの所枝折門、日覆より雪の積もりし松の吊枝をおろし、すべて環の宮明御殿、雪降りの模様よろしく銚り附け、こゝに腰元四人、竹箒を持ち雪を払うて居る見得、雪おろし琴唄にて幕あく。

ト床の浄瑠璃になり、

へたどり行く、心の内こそ哀れなり。平の像仗直方は、環の宮の御行方、しらぬ筑紫の時鳥、夏去り冬のいつしかに、既に今年の日の数も、春待つ許り枯れ果つる、庭の落葉の白雪も、仕丁代りに腰元が、

竹の園生のかしずきも、物侘しくぞ見えにける。

ト雪おろし、合方になり、皆々雪をかく事あつて、

○ なんと皆さん、雪も追々たんとつもつて来たぞえ。

もうやめにして休もうじやないかいな。

□ それく、若菜さんのいやる通り、もう仕舞うても

よからうわいなア。

△ しかしながら雪の積もったというものは、綺麗なものじゃないかいなア。

× さいのう、綺麗といえ、儼仗さまの娘御敷妙さまは、御器量というお行儀といい、

□ それく、八幡さまと並んでおいでなさると、とんとお雛さまのようじやわいなア。

○ あの敷妙さまの御姉御様に、つぎはぎさまとやらおっしゃる方が、あるではないかいのう。

□ エ、何をいわしやんすぞえ、袖萩さまじやわいのう。

○ オ、それく、その袖萩さまとやらは、何所へお出でなされたのじやえ。

× サアそれは、十一年ほど先に、忍び男をお慕いなされて、家出をなされたという事じやわいなア。

○ ほんに羨ましい事じやのう。オホ、。

△ これはしたり、又そのようにお上の噂、儼仗さまが

お聞きなされたらお呵りであろう。サア、奥へ行つて休もうではござんせぬか。

皆々 ほんにそれがよからうわいなア。

へ打ち連れてこそ奥に入る。

ト腰元皆々入る。

へ館も静け敷妙御前、娘ながらも案内は、武家の行儀の表門。

敷妙 ト向うより敷妙、傘、下駄、供侍一人ついて出て来り、敷妙参上つかまつる。誰ぞ御取次ぎを。

へおとなう声に、局立ち出で、

ト奥より局、初霜出て来り、

局 これはく姫君、イヤ義家公の奥様、この頃は便り

もなく、御機嫌いかゞやと儼仗様御夫婦も、殊ない御心

局 労、ようこの雪中を御出で遊ばしましたな。

敷妙 初霜には出迎い大儀、今日これへ参りしは、自らの

局 見舞いでない。夫義家よりの使者じやわいのう。

敷妙 御使者とあれば猶のこと、そこは端近、まずくこ

局 れへ。

敷妙 ゆるしてたも。

局 へ上座に直り、

儼仗様にも奥方にも、今日これへ御入来の桂中納言様をおもてなし。シテ御使者の口上、私へ仰せ聞かせら

れ下さりましょうなら、ありがとう存じます。

へ承らんとありければ、敷妙威儀を繕い、

敷妙 使者の趣き余の儀にあらず、環の宮の御行方なき事、御かしずきの像仗殿の誤り。日延べの日数も今日限り、もし言いわけなきにおいては、罪を糺すは義家が役、必ず遺恨に思われなと、使者の口上かくの通り。

へ述べければ、局はつと了承し、

局 仰せの趣きさっそく御披露つかまつり、後刻自身に御返答申しあぐるでござりましょう。まずそれまでは一間にて御休息遊ばししょう。

敷妙 役目も済めば父母の御機嫌も伺いたし。そんならしばし奥の間にて、

局 久方ぶりの御対面、さぞお悦びでござりましょう。

敷妙 そんなら初霜、

局 ドレ、御案内致しましょう。

へ打ちつれてこそ、入りにける。

本舞台、今までの道具上手へ引く。

へたゞさえ曇る雪空に、心の闇の暮近く、一間に直す白梅も、無常を急ぐ冬の風、身にこたゆるは血筋の縁、不便やお袖はとぼ／＼と、親の大事と聞くつらさ、娘お君に手をひかれ、親は子を杖子は親を、走らんとすれど雪道に、力なく／＼たどり来て、垣

の外面に、

ト雪おろしはげしく、日覆より雪をふらせる。向うより袖萩、さら毛、切継衣裳にて、竹杖をつき出て来る。お君同じく切継形、三味線を抱え、袖萩の手を引き介抱しながら出で来り、花道よき所にて止まり、

袖萩 ア、嬉しや、誰も見咎めはせなんだか。

お君 アイ、門口に侍衆が居睡って居やしゃった間に。

袖萩 オ、賢い子じゃの。像仗さまはこの春から、主のお屋敷にはござらず、この宮さまの御所にと聞いて、どうやらこうやらこゝ迄、

へ来る事は来れども、御勘当の父上母様、殊に浅ましいこの形で、誰が取り次いでくれるものもあるまい。

お目に掛かって御難儀の、様子がどうぞ聞きたいものじやなア。

へ探ればさわる小柴垣、

トこの間に、兩人舞台へ来て、枝折戸を探りみて、

ム、こゝはお庭先の枝折門、戸を叩くにも叩かれぬ不孝の報い、この垣一重が黒鉄の、

へ門より高う心から、泣声さえも憚りて、簀戸に喰いつき泣き居たり。像仗はかくとも知らず、

トこの間に、奥より像仗出て来り、



袖 萩 中村 勘三郎

儼仗 ム、垣の外そと面に誰やら人声、コリヤ、女子おなこ共はおらぬか。

へ言いつゝ自身庭きみの面、外にはそれとなつかしさ、恥はづかしずかしさも亦先立またって、覆おほう袖萩しらぬ父、あけて恠びくり戸をびつしやり、

トこの文句の通り、儼仗、袖萩を見て思入れ、浜夕、腰元奥より出て、

腰元皆々 何の御用でござりまする。

へ何かの御用と腰元ども、浜夕も庭に立ち出で、
浜夕 儼仗どの、何でござるぞいのう。

儼仗 イヤ、何でもない。見苦しいやつがうせおった。コリヤ腰元ども、早く追い出せ。

へ夫の詞は氣も附かず、

浜夕 エ、何をきよと／＼いわつしやる。犬でも這入りましたか。

へ何心なく戸を開けて、よく／＼すかせば娘の袖萩、はつとあきれて又ぱったり、娘は声を聞き知れど、母さまかとも得も言わず、母は変なりわりし形を見て、胸一杯にふさがる思い、押し下げ／＼、

ト浜夕、よろしくあつて、

ア、定めなき世といいながら、テモさても、思いがけない、

儼仗 コリヤ／＼婆、何を申す。

浜夕 やつぱり犬でござりました。……コリヤ犬よ、憎い大め。親に背いた天罰で、目もつぶれたな。神仏かみほとけにも見離され、定めて落ちぶれているであらうとは、思うたなれど、あんまりきつい落ちぶれよう、今思い知りおったか。

へ余所よそにしろすも涙声、様子しらねば腰元ども。

ト浜夕、よろしくこなしあつて、腰元四人枝折の傍へ来て、

□ 見れば手足の尋常さ、コリヤ只の物貰いじゃござりますまい。

△ さいなあ、あのような可愛らしい子を連れて、ほんにまあ可哀そうに、

× 昔が思いやられますわいなア。

○ エ、何のマア可哀そうな事があるものか。コリヤコリヤ、そこな物貰い、物貰うなら中間衆ちゅうげんしゅうには貰わいで、お庭先へ見苦しい、とつとと立って行きゃいのう。

へとせり立てられ、

袖萩 ハイ／＼、どうぞ御了簡なされてすこしの間、

○ ハテ、しつこい、早う立って行きゃいのう。行かずばこうして、

ト箒をふり上げる。



袖萩 夷川延若

へと女中が口々、
コリヤ待ちや。……イヤ物貰い、おあしがほしく

ば、なぜ唄をうたわぬぞ。願いの筋もなんなりと、

へ諷うて聞かせと夫の手前、ちっとの間なとひま入
れたさ。

袖萩

アイ。

へアイとは言えど袖萩が、久しぶりの母の前、琴の

組とは引きかえて、露命をつなぐ古糸に、皮も破れ
し三味線の、

ト袖萩思入れあつて、三味線を出して、

罰も慮外も顧みず、お願い申しあげます。

へ今の憂身の恥ずかしさ、父上や母様のお気に背き
し報いにて、二世の夫にも引きわかれ、泣きつぶし
たる目なし鳥、二人が中の、

コレ、この、

へお君とて、明けて漸々十一の、子
を持つて知る親の恩、知らぬ祖父さ

ま、

お君
祖母さま。

袖萩

アコレ。

へ慕うこの子がいじらしさ、不便と
思し給われと、あと諷いさしせき入
る娘、孫と聞くより涙夕が、飛び立
つばかり戸の透間、抱き入れたさす
がりたさ、祖父も変わらぬ逢いたさ
を、隠してわざといかり声。

トこの間、涙夕、不便だというこな
し。像仗思入れあつて気をかえ、

像仗

ヤア、かしましい小唄、聞きとうな

い。コリヤ女ども、奥へ行てお客人をもてなせ／＼。

腰元皆々 かしこまりました。

へ腰元どもは立って行く。

像仗 コレサ婆、ひま入るほど為にならぬ。武士の家で不義した女郎、叩き出すはまだしも親の慈悲、長居せば打ちはなそうか。

浜夕 そりや又あんまり。

ト泣き伏す。

像仗 何があんまり、親の恥を思うて名を包むは、まだしも思いのほか、今となって身の置所なさの詫言、恥面も構わずよくうせたな。但しは親への面当か、わざとその形を見せにうせたか。アノこゝな憎いやつめが。

へと怒りの声、袖萩悲しさやる方なく、なんの／＼誓文、勿体ない、さりながら、

袖萩 そう思し召すは御尤も、大恩を忘れた淫奔、我が身ながらあいその尽きたこの体、お詫び申したとて何のお聞き入れがあるう、そりや思い切っております。お屋敷の軒までも、来らるゝ身ではなけれども、

へお命にかゝる一大事と、聞いて心も心ならず、顔押しぬぐうて参りました。

不孝の罰で目はつぶれる、この子連れて此処の軒では追いつてられ、彼所の橋では打ち叩かるゝ憂目に逢うて

も、この身の罪にくらぶれば、まだ／＼業の果たしようが足らぬと、

へ未来が猶しも恐ろしい。

この上のお願ひには、娘のお君お目見得、と申すも慮外、只の非人の子と思し召し、たった一言お詞を、

へお掛けなされて下さりませと、歎けばお君も手合わせ、

トこれにてお君、よろしく前へ出て、

お君 もうし旦那さま、奥さま、ほかに願ひはござりませぬ。お慈悲に一言物おっしゃって、

へ下さりませと言ひ馴れし、袖乞い詞に浜夕が、

浜夕 おゝ、可愛いやなア。子心にさえ身を恥じて、祖父さまとも祖母さまとも得いわぬようにしおつたも、みんな汝が淫奔ゆえ、畜生のような腹から見事犬猫は産みおらず、生まれ落つると乞食さす子を、アレあのようにおとなしゅう、

へ産みつけざまは何事ぞ。

あんまり憎うて、おりや物がいわれぬわいなア。

へむごう言うのは可愛さの、うらの浜夕幾重にも、

お慈悲／＼と泣くばかり、像仗なおも声あらゝげ、

像仗 ヤア、親が難儀に逢おうが逢うまいが、女めがいらざる世話、ア、同じ兄弟でも妹の敷妙は、八幡殿の北の